



初懐緯

信濃伊九撰釋

愚考初懐紙の百歌を抄行る事一書こ
しよ小鶴百歌と唱一て題号おし此百歌を
前五十歌後五十歌と二座よ成就しあり
のるりの事故事といよ注書るを初れ自
注と号して前五十歌の解るりよと述ん
茶五十歌よ跋足千里出産後の産る不系
後日る不ト峻水似春の三子出産之世人
志るところありと述んねていよ
日此書をさすうに勢のおみか

はら 一

御ふをその事去年の相れ実

愚考目のまをる月の杖よ對しての雅
えるりの暇るを重代を脱して相の家と依
りり相る鳳凰の栖す一きまをるまを撰
出してれ白依るり御を階菴をいりあり一
雪村の柳見えよゆく掉さして

一書よ人名を生前の業ふいなるねえ抄てよ安ん
雪村のみほくら柳を見よ初といよ白なる主水
や貞徳の白よりくも志る一
雪村の柳見えよゆく宮古上下桂の男の田
中よありて雪村朝夕一こふいりる本振
の桂るりのを也とよりりくも志る一
とを京子の昔洪水よ多ありて枯しとせり
方りる被比及洛中洛外の人ありとを今八知る金一

雪村の柳見えよゆく宮古上下桂の男の田
中よありて雪村朝夕一こふいりる本振
の桂るりのを也とよりりくも志る一
とを京子の昔洪水よ多ありて枯しとせり
方りる被比及洛中洛外の人ありとを今八知る金一

酒を懐ふ入相れ月

秋の山を去の弓の多うらむ
炭火竈 出ぬてきれあつらふ
里ししるまをのり形むら縁

愚考懐る初厨集 ふトハリるり門帷
戸懐とりし則暖簾とる未考ハ半ら
るり日本紀曰神后皇后四十六年百瀬
必の宿古王より歌ふとりし歌を兼り
とりし人の記をひきこ集よ歌す
ふ氣のる 詔よ 詔かひきよ

一書ふ云翁の自注を歌し 多あひぬる花の
故よりとりし書有てその注よ曰箱根茶
ふをとりて 詔をたれひよせしる疑向甚

はら二

たれしるしと云く 予はししれれらら
申し翁の自注るりしりぬる基しき
華説るりる事 伊豆の三島を東海なる
るりる事 伊豆の三島を東海なる
より河津一行るるといふ事 伊豆の
往還るり 伊豆の三島を東海なる
りしる社説 伊豆の三島を東海なる
るを 伊豆の三島を東海なる
心る 社説 伊豆の三島を東海なる
社因法師 詠和歌 伊豆の三島を東海なる
三島の額 伊豆の三島を東海なる
惣持守 三島大明神と云く 天乳川 伊豆
ありしる 伊豆の三島を東海なる
社 伊豆の三島を東海なる

さやからむすりそまのの約ふ雨おかみせ
よと附くさるるりさるる本抛のあかりを
やと解きせつりさるる花説ふうさるる
之島とや由来さるる面足号就ふさるる
あまは就化して石と形の中蓬菜方丈
羸削の三島浮ひ出の故よ三島とさるる
三島とさるる武帝天平五年れ出現るり
さるる存宝龜年中伊豆よ過産扱はよ
う法守とさるる又法補教後集よさるる
あまは就化して雨乞の歌をとさるる
伊とさるる實徳あまは伊とさるる
實説るるその禮次トよ
急佛よ狂人傷い法くよあり
愚考り或りのよ叡山の平等供をとりよ

傍に光をささりて白夜の境よて是就
を履るる系れ宵一トは境よて後船
をさるるの舟伊とのあまは伊とさるる
送りさるるあまの守れ鏡よて才子淨ま阿
國梨よ對面ありて又を建よりのゆく
あまは伊とさるる伊とさるる
るるるる必定るる

濟るるく建敷の奥をさるる
敵よせらるるむら松れ群
皆河の梨よ折烏帽子あまは伊とさるる
五音曰松永録正久秀志その跡よ建敷
奥ありさるる敵ららるる録波をさるる
あまは伊とさるる伊とさるる
芦のむらら濟河のあまは伊とさるる

第... 愚考存松永の侍名流
 喜せり賢のそ家祇の佐るしむ
 うき世の流ゆをて喜のえをせめ
 惜まり一宿の本槿のちらこいよ
 のちすむ女きめつこうらし
 山ゆみ乳をとのむ猿の群うま
 いのちをて甲斐の袋と見えよ
 法のと我意髪をて記れあむ
 ばらうし一記をとりちる子の戸
 笑目よりの年をそゆるも好れ陰
 とらしき小雨のりゆらうまら
 のころ雪のころのしれぬし
 花の散るの流見え通るりよて子廻る
 志はくれば群しそ葉をとら歌

毎きののゆきさうり流り終朝
 らげしつ眉をとりなまきぬく
 うき世の流ゆをて喜のえをせめ
 愚考存松永の侍名流
 喜せり賢のそ家祇の佐るしむ
 うき世の流ゆをて喜のえをせめ
 惜まり一宿の本槿のちらこいよ
 のちすむ女きめつこうらし
 山ゆみ乳をとのむ猿の群うま
 いのちをて甲斐の袋と見えよ
 法のと我意髪をて記れあむ
 ばらうし一記をとりちる子の戸
 笑目よりの年をそゆるも好れ陰
 とらしき小雨のりゆらうまら
 のころ雪のころのしれぬし
 花の散るの流見え通るりよて子廻る
 志はくれば群しそ葉をとら歌

云の海を玉の流るは此是よ太宰少式い
 片事をも侍る侍りて所事ととも定めし
 申よまよあつうの侍り道一
 弘勲の堂に替ひあし
 待よあいの薄る階より子の申
 友よあ壇のおうきこれ侍
 百よあそい厨入りくらふ鄙曇
 門を魚を寸紙際如 寺
 眼をよあふの噴く武士ふん毛驢
 あくあみの牧の川を撰くいよ
 愚考紙際り此寺を源するくくして程有
 の武士をくく侍り次る美剣義也の牧
 統日本紀一文武天皇四年於徳必定牧
 比奴牛言云く

終の事夕日とて月よあつこめて
 乳の能く宝杖さくよまらり
 結る島あつらりを花のあつらせ
 愚考他めよ此花をむりえきよして電光
 朔夜のゆく一照りそのよたむいよせまらり
 古今集よあ花のまて月のうはつらあ実や
 ろり光をを花とちり守はりよふ又花の白
 入已り火をよこれ花や花の白をとりよ
 まくく梅のよれ光を花とえきよつら心
 せの五文字又うけくまを
 けりあしあつらふ後をとく
 人あつらく一草えあのをらあ
 酒壺いよむ金山の酒
 愚考きよくその日の能く止ぬとて

その金山の洞と云く盗人の住居し酒之
とりの傍にありて盗人せむる所と云す事と
乞を川上桑師の侍あり

此玉の武仙と云右の画よりせ

京よ渡する醒の年 此 水

年元はれより十二月酒登いさむる川上
桑師此國の武仙を日本武尊日本紀曰
景行天皇二十七年冬十月熊襲を討
たむ時たより十六果則十二月熊襲を
よひしりありまを地形の体をも似ひる
あり熊襲の魁師より川上桑師とりし強
力の大将なり其髪を解きて是女の姿よ
るりありたりそり桑師の酒豪の時を似
ぬを洞の入りしり佩ありて桑師の室に入

女よりの中ふ交りしり桑師その妻よ子の
宮殿に感ずいて則ち身を携て序を回し
て盃を飲みて酒をのませはく戲弄す時ふ
夜更て人々すきぬ桑師又酔ぬありに
日本武尊酒のうちの釵を袖て桑師の胸
を刺りしり死す及りて桑師頭を打
てしり死す待りしり桑師の時より
死をぬけて待りしり桑師死して云酒を流
人もや對て曰若くは是大足彦天皇の子之
名を日本武尊男とりしり桑師又酔て云
桑師は是玉に中の強力を是をもちて是
時の法人身威力より勝りしりて後を以て
りしりのなり 吾々も武力よありしりの
といふる皇子のありしり

せりて此書をを強ようは守よるる名所の
画工よあつそと始て三白此筆をいふ
きりてさきさきその名をさうは守よ加
茶川の名水をとせりてかきてはけりしに
列磯井よめて波よきりてはは日本武
尊伊吹山の標よめて大蛇をを踏きいひ
時水は火のさきくよかめきりりよ碑
井の清水よいよてかめきりりよ
ありよゆよ聖井と号すりりその故り
流より流よを奪りて日本成る東夷
征伐と稱しりりて熱熱の故りりり
よ合せりりりり
玉川やあゆりり六つ此所よ
江波しりりりりりり

舟花の比は精りりり見ゆりり
愚考の傳りり紙よ白後於於にこは花の
みるさきりりりり見ゆりりりりり
筆りりりりりりりり後於の名をよ
み入るりりり古歌反の増りりり
行りりりりりりりりりりり
南むく葛城の烟の雲消りり
親と基をさうりりりりりり
條はりりりりりりりりりりり
費りりりりりりりりりりり
一書よ楯の葉よ條はりりりりりり
とりりりりりりりりりりりりり
海を附りりりりりりりりりりり
きり心をとるりりりりりりりり

のくきし冨の鼻と志 月
谷の雨枝 七里をめぐすら志
伊弉泊の肉のきれ 川面
水らり方未居く音ハ所をて
菰をせりりの 院しを田
二月の蓬萊人あすせらるや
婦あら牛の 運き日の新
胸あもぬ然の端を織りて
おりのいあらしを以て草の荊せし
暮のきふし 柵依りて 大々屋啼
木魚きししゆり山陰りし
因人をやめて休むら 朔月夜
あそしし 知すもろのたきし合
同しし 露し 禿の名をせりて

心なるしし 世を 蟬此 ころ
三のなめ 名所の様よりれ山
一書りし 曰よりし 夢の様をて心花るるを
あしよせりて 懐く口傳ありの所傳を受へし
あしし 春の芽れを伝へて
依傳をたわぬまきのみをまきし
行よりし 夢み 萍のうはら
愚をり 撰集抄よむりし 楊子 必竹の是と
りし 雨上 高むすして 初よ 尼傳りりし
室の 抄女よを 傳りりし ちの ちの ちの ちの
ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの
卿よ 抄の ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの
伝りし ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの
すも ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの

此の遠くを吉今の通例あり傳ふ曰村
るる曰月と七月とよ月押はるる
ひ込てる痛るる梅すく
る事ハむらるる梅すく
夜の白よ見えぬあり祭斗よおく
暑中夜すく
見して地とりの夜を残異の侍を
す事ハむらるる梅すく
それを伝ふ林すく
るるといふ
入橋つら
てよあり引
や朽あり
ふ汝ま出

ありとあり
すく本の
すく此花の
とるを
傳れ眼
行
梅すく
むらるる
地とりの
侍
梅すく
愚者
すく
あり

此の遺りたる古今の通例あり侍よ曰村
 与るは月と七月とよ月押はるる一むす
 ひ是てを梅なり一梅なり一このまは月
 なる事ハむらるるを傳ふりやして此地とる
 夜の白よ見えぬ所の葉斗よむく地を
 暑中夜なりしころの村なる七月と
 見え地とりの夜を残暑の使を指せしり
 すすむらむら一白より山下林に有れ傳るり又
 それを伝ふら秋孝よりその地とる夜を秋と
 る事とりのまの身ものまの村撰と次よ伊勢
 入橋つらるるを其時伊勢の記よ曰は換の橋よ
 てよあり引一はくむ、故まの精を年より
 や、朽よあり、の、江のはり一是ハ新嘗の条
 入故まは、不、あ、ま、よ、して、演、出、あ、よ

はの十三

少よみき一の橋とる中こそそのおの橋の
 朽よ道を、本撰末てはくるとるなり愚老
 赤形よあり一は、去人、御、傳の傳書るりとを
 見すりも地、曰よ、ぬて、百、新よ、二、計、有、一
 又よ、山の、類、白、洞、を、袖、よ、處、を、終、よ、新、よ、守
 月、を、山、よ、葉、よ、新、を、白、よ、秋、を、其、の、夕、よ、對、の、
 あ、ま、ま、入、卷、よ、ま、ま、初、心、の、書、り、や、る、あ、を、
 白、を、あ、り、して、梅、り、秋、り、り、さ、り、ま、あ、
 の、本、体、と、り、入、る、地、名、と、臨、境、の、て、よ、ん、凡
 して、美、好、の、數、の、ゆ、を、え、る、い、よ、地、と、る、夜、の
 伴、を、志、り、よ、ふ、を、相、の、隣、の、や、り、第、い、よ、い
 そ、り、あ、り、る、り、梅、の、む、ら、の、よ、ま、ま、梅、を、因、り、
 る、よ、の、み、は、り、い、は、あ、り、僕、文、よ、ま、ま、替、の
 山、度、よ、會、す、是、干、の、ま、と、能、の、字、と、流、す

也之譏曰吾不臣天子不友諸侯耕而
食之塢而飲之吾不求於人無上之
名無君之祿不仕而事力云又祖庭
事苑曰居士之四德といひ不求官士寡
欲蘊德居財大富守道自怡云
紅ふ牡丹十里の糸を分て
愚考東坡賞牡丹詩ふ十里珠簾半上鉤
と云ふ牡丹ふ十里糸の名あり千里の糸と
すれは非なり

雲すむ公にふゆ湯とて
岩根ふみききく流流とて音ひすそ
笑一や二井の糸法師とて
此僧言ふ糸乃法師の字あるを待
たぬ糸なるより糸さやふに近し

管絃をいふ者ありて
何れ哉れ盧山よとありて
愚考管絃とて絲竹の糸とて
白虎通曰ハ音者樂記ハ土曰埤竹曰管
皮曰鼓鞀曰笙絲曰弦石曰磬金曰鐘木
曰祝故云或る管絃或ハ磬鼓と合す
とありて是引の盧山ハ枕詞ありて
枕詞を日本の文苑ありて是引日本
盧山ありて盧山寺の後流岳院寛元三年
任心覺瑜上人の建立ありて糸与所
今出川通より日本糸字あり昔の惠
遠法師老翁と化して盧山ハ二字を
任心と授くより日本盧山天台講寺
と号す

